

初めての「かけつぎ」

スーツというものをほぼ着る機会のない私は、それでも年に一度くらい何かの式典やら、子どもの卒業式やらに見舞われて、あまり目立つのもどうかとの思いから、スーツを着る羽目になる。なかなか購入の機会は訪れなかったが、ある年に思い立って購入してみた。

以前から気になっていたオーダースーツの店で、何度となくウィンドウショッピングのように訪ねたことがある。何ひとつ買うことがないままに美しい洋服を眺めていたのである。そんな話を友人としていたら、その店の主人を知っているという。ちょっと顔つなぎをしていただいて、裏の手を使わせていただいた。その店には何年か前にオーダーで作ったお客さんのものが、ひよんなことで在庫として残っているものがあるという。それを分けてもらう。平均的体型より少しやせ型の私は大概の服はそこそこちょうどよいサイズとなるので、少しのお直しで合わせることができた。店の方もただ在庫で残るのはもったいないということで、「お互いに良い」と言ってくれた。正規のルートではとても購入できないものを有難く手に入れることができた。めったに着ることのないものではあるがちょっと気持ちが良い。

そうして年に一度がせいぜいの、毎年同じスーツを着ている。これが何の機会もないと2年くらい眠ったままということがある。久しぶりに袖を通してみると困ったことに穴だらけである。私の無精がたたった。虫食いである。いい生地なのでさぞおいしかったのであろう。今更ながらに悔やまれる。とはいうものの、自分のせいである。恥ずかしいのと申し訳ないのとをませこぜにしなが、恥を忍んで購入した店を訪ね

てそっと聞いてみた。「そうかそうか、やってしもたか、まあしょうがない。かけつぎを紹介してあげるから行ってみるといい」と。これも噂では聞いたことのある「かけつぎ」を訪ねた。普通の住宅に小さく「かけつぎ」とだけ上がっていた。ドアを開けて声をかけた。スーツを見せた。普段は1カ所2千円でお願ひしていると。10カ所以上はある。物は相談でいろいろ聞いてみた。こんな繊細な生地をどうやって繕うのだろうか。糸は持っているのだろうか。糸はこの服から引っ張り出すらしい。2週間ほどで電話がかかってきて伺った。どこに穴が開いていたか分からない。とてもありがたかった。復活した。ほんとに申し訳なかった。服を仕立ててくれた職人さんにも、穴だらけを直してくれた職人さんにも頭が上がらない。

いろいろな人の手を介して私のスーツ姿は成り立っている。擦り切れるまで使いたいと思う。でも年に一度の行事ではいつになっても擦り切れることはなさそうである。着慣れることもない。馬子にも衣装と言われる。それよりもこのスーツに合う体型を維持しておく必要がある。たるんでいる場合ではない。気を引き締めて生活していこう。

清原 正人

